

VALERIE JOYCE

ヴァレリー・ジョイス

ジャズのスタンダードの豊かさを知って、心から歌いたいと思った



しっとりとした、深みのあるスモーキー・ヴォイスは、まさに大人の女性の味わい。深紅の薔薇の花びらを思わせる芳醇な歌声が、人生の蜜も苦さも知り尽くしたベテランの黒人女性シンガーのものだと言われても、驚くことはなかっただろう。

しかし目の前に現れた清楚な印象の東洋系の女性が、「ニューヨーク・ブルー」の心地よいアルト・ヴォイスの主だったと聞かされたとき、自分の中で勝手に作り出していたイメージとのギャップをすぐに埋めることはできなかった。

「ニューヨーク・ブルー」は、そんな落差も楽しませてくれるジャズ・ヴォーカルの新星ヴァレリー・ジョイスのメジャー・デビュー作である。

「歌声とイメージが違っていてよくいろんな人に驚かれるんですよ」

さわやかな笑顔を浮かべる黒髪の女性は、ちょっとはにかんだ。捉えどころのない声なのだ。また、決してつややかな美声でもない。しかし一度耳にしたら、癖になる声なのである。気にせずにはいられない不思議な吸引力がそこにある。アメリカ人の父と日本人の母の間に生まれたヴァレリーは、横浜で育ち、その後父の国にわたり、大人になった。

「音楽に目覚めたのはずっと遅かったです。子供のころからピアノは習っていたけど、音楽で身を立てるなんて考えたこともなかった。でも音楽が大好きだったから、将来は音楽に関連した仕事をしたいと思い、大学ではミュージック・ビジネスを専攻したんです」

転機は思いがけないところからやってきた。

大学に入って初めてジャズに目覚め、ビッグバンドに入りたいと思い、ピアノのレッスンを受け始めたところ、先生から「あなた、声がいから歌ってみたら」と薦められた。デューク・エリントン、ビリー・ストレイホーン、コール・ポーターといったクラシックなジャズに夢中になるまで時間はかからなかった。「声質が合っていたのか、楽に歌えたんです。今までポップスやロックを聞いても一度も歌ってみたいと思ったことがなかったのに、ジャズのスタンダードのメロディやハーモニーの豊かさを知って、心から歌いたいと思ったんです」

大学を卒業したあと、シアトルで会社勤めをしながら歌い続けた。レストランやカフェを巡って、「歌わせていただけませんか？」と働きかけ、自分の方で道を切り開いていった。地道な努力が実り、数年後には音楽だけでどうにか食べられるようになった。ヴァレリーは更なるステップ・アップを目指して、こつこつ貯めたお金でファースト・アルバム『VALERIE』を自主制作し、ネット販売を始めた。扉は思いがけないところから開いた。「ジャズの専門誌が私のアルバムを取り上げてくれて、その記事を見たプエルトリコのラジオのパーソナリティから“アルバムを聞いてみたいので送ってほしい”と連絡があったんです。しばらくして電話がかかってきて“アルバムの中の<クリスマス・イヴ>という曲、ストリングスとやるといいだろうね”って。で、その人がニューヨークで活躍するストリングス・アレンジャーのカルロス・フランゼッティにコンタクトしてくれた。する

と彼もアルバムを気に入ってくれて、チェスキー・レコードを紹介してくれたんです。私は本当に運がよかった」

まさにシンデレラ・ストーリー。でもそれが単なる偶然や奇跡ではないことをアルバムが証明している。オリジナル1曲を除き、メロディアスなスタンダード・ナンバーや珠玉のポップスで構成。ニューヨークのベテランたちが奏でるアコースティック・アンサンブルをバックに、情感を込めて彼女は歌う。そのスモーキーなアルト・ヴォイスが、緊張を強いられる現代生活に疲れた心身を芯からほぐしてくれるのだ。

「チェット・ベイカーみたいに、静けさを取えるムードのあるミュージシャンになるのが夢」

アメリカン・ドリームを追い求める心の強さと、日本的な美意識と繊細さを併せ持つヴァレリー。ジャズの世界に新しい風を呼び込みそうだ。(工藤由美)

●PROFILE 横浜で生まれ、ワシントン州のコマのバジェット・サウンド大学で音楽ビジネスを専攻。大学のビッグバンドにピアニストとして参加したのがきっかけで、ジャズを思い始める。ヴォーカル・レッスン、ジャズ・キャンプ参加を通して腕を磨き、卒業後シアトルで音楽活動を開始。自主制作アルバム『VALERIE』が音楽関係者の目に止まり、ニューヨークのジャズ・レーベル、チェスキー・レコードのオーディションに合格し、デビュー。(工藤)



「ニューヨーク・ブルー」
(ユニバーサル ミュージック UOCT-1148)